

FLUTE

フルート

低音域・中音域・高音域の出し方のコツ

飯島和久 いじま・かずひさ



◆出身 逗子開成高校、バリ・スコラ・カントルム音楽院、バリ・エコール・ノルマル音楽院
◆所属 上野学園大学短期大学部教授
◆趣味 畑、薪割り、料理
◆血液型 B型
◆星座 かに座
◆読者にひとこと 私にできたのだから皆もできる！
◆手紙の送り先 「飯島和久」で検索（PCのみ）

■音の悩みは2タイプ

みなさんは、音に関してどんな悩みを持っているでしょうか？ 大きく分けて、2つのタイプがあるのではないのでしょうか。

【タイプ1】

- 低音はボーっとした音になり、しっかりした *f* の音が出ない
- 高音は広がってしまった音になり、透明感のある音や、響きのある *p* の音が出ない

【タイプ2】

- 低音から高音まで音が細くチーチー鳴っていて、*p* は出しやすいが、*f* と楽譜に書いてあっても大きい音が出ない
- 高音（特に B・H・C）のときに力が入ってしまい、時には唇が「ブー」と鳴ってしまう

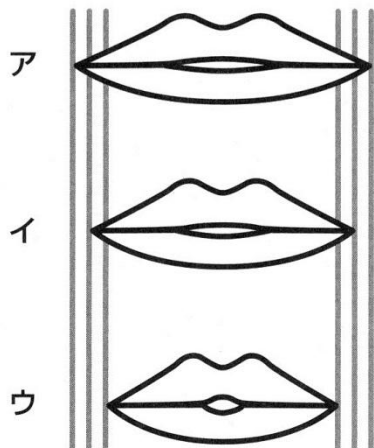
このどちらかではないのでしょうか？

低音から高音までよく鳴り、響き、バランスの良い音を出すコツを書きます。

■低音域のコツ

低音域ではどういう音を出したいですか？ そういう質問をすると、「今はボーっとした音が出ているので、しっかりした音を出したい！」という答えが返ってきますが、しかしそういう人は唇をゆるめすぎているんですね（「タイプ1」）。

【図1】



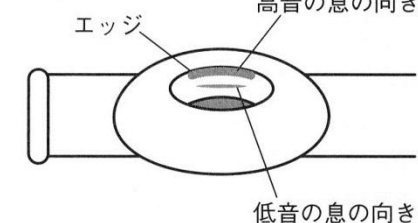
「唇を開ける＝ゆるめる」と思っている人が多いかもしれませんが、【図1のA】のように、横に平たく1cm～1.5cm程度開けて、唇をピンと張るようにするのです（ただし、えくぼができるほど強く左右に引いてはいけません）。

それでもしっかりした音が出ないときは、唇の穴を上下につぶすくらい狭くするとよいでしょう。また、息の向きも真下に入れるように吹くのではなく、【図2】の低音の息の向きのところ（エッジの下の壁）をめがけてみましょう。歌口の穴は【図3の工】程度下唇でふさぎます。

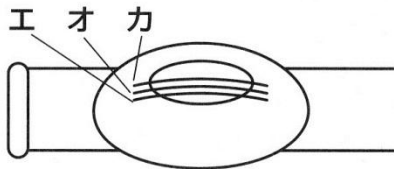
■高音域のコツ

「タイプ1」の、口が大きく開いてしまっている人が、【図1のウ】のように唇前に集め、唇の息の出る穴を小さくし、息を【図2】の高音の息の向きにすることで、今までより柔らかく響きのある音が出るでしょう。唇を硬くして小さくするのはなく、唇前に集め、柔らかくして小さくするのです。

このときは歌口の穴を【図3の力】くらいふさぎます。これは唇前に集めることによって唇の肉でふさぐことができ、【図工】から【図力】に自然に変わります（唇の当て



【図3】



る位置を変えるわけでは決してありません）。

「タイプ2」の、口に力が入って閉まりすぎてしまう人は、腹筋がうまく使えていないかもしれません（「おなかの支え」については、次号で詳しく書きたいと思います）。

高音は息のスピードがないと上唇に力が入りすぎてしまいます。おなかを意識しつつ唇の力をゆるめ、唇を前に集め柔らかくするのです。

■中音域のコツ

これは低い音と高い音の中間の吹き方です。唇に力を入れすぎず、ゆるめすぎず、横に引きすぎず前に集めすぎず……です。息の方向も研究して、自分の中のいちばんよい響きを探してください。歌口の穴を【図3のオ】くらい唇でふさぎ、息の向きは高音と低音の中間にします。

まず中音域の練習をして、中音から低音、中音から高音と、唇と息の向きを変えていくことが重要です。また、一つひとつの音で、唇の形や息の向きを意識して練習してください。

ほれほれとする音を出すことは、誰にでも可能です。私にもできたのですから、みなさんも必ずできます。もしかしたら、砂の中に隠れている宝石を探すようなことかもしれません。しかし見つけたときの喜びを想像して練習してください。

きっと輝いた宝石が見つかります。(^^)/

「第48回軽井沢ミュージックサマースクール」受講生募集

【日程】
8月1日（月）～5日（金）、ほか
【会場】
ホテルブティ・リヴィエール軽井沢
【講師】
ヨセフ・モルナール（ハーブ）、
飯島和久（フルート）、ほか
☆詳細は今月号の「スペース」欄を
ごらんください